

季刊 連句 第45号

平成六年六月一日発行



連句との三十年 (南柏雜記 43)	1
歌仙「花の盛り」	捌 上月 淳子・評 東 明雅 ... 2
A. C. Cの連句実作を受持って	秋元 正江 ... 4
A. C. C講義の一年	式田 和子 ... 6
「灰汁桶の」の巻鑑賞 (VI)	東 明雅 ... 8
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第四十九回 猫蓑会	11
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻「梅の若枝」 捌・文 中川 哲	
第二部 二十韻 十二卷	
文 執筆の役を終えて.....	仏淵健悟
「馬追」付勝練習二十韻	東 明雅 ... 20
百韻「麗かや」	捌 坂本 孝子 ... 22
源心一卷 歌仙二巻	捌 東 明雅・秋元 正江 ... 24
	坂本 孝子・式田 和子 両吟
明雅先生の中寿をお祝いして	秋元 正江 ... 26
「芦丈翁俳諧聞書」編集奮闘記	登坂かりん ... 28
雁帛往来・終刊の辞	29

連句との三十年

南 柏 雑 記 43

雅

昭和三十六年（一九六一）に、はじめて根津芦丈先生にお目にかかり、連句を教えていただいていたから、私は外的一切をなげうって、これに没頭した。それから三十余年の生涯は連句とともに生きて来たようなものである。

今、振り返ってみると、昭和五十五年（一九八〇）までの二十年間は、信大連句会を作った、芦丈先生の指導を仰ぎ、一所懸命で連句を勉強していた時代である。その様子は、「芦丈翁俳諧聞書」に書いた通りであるが、最初から最高の先生に巡りあえたのは最大の幸せであった。先生は四十三年（一九六八）には歿されたが、その後は、瓢左先生や牛耳先生にもおつきあい頂き、自分でも満足のゆく作品が捌けるようになった。それは当時の信大連句会のすばらしい連衆の力によるものと感謝している。四十七年（一九七二）の「夏の日」を読み返すと、皆で連句を楽しんでいた様子が偲ばれて懐かしい。

昭和五十五年、信州大学を停年退職した私は、東京に出て、翌五十六年（一九八一）、朝日カルチャー・センターの講師となり、連句を教えることとなった。受講生の方は皆熱心であり、また、優秀な方が多かったため、時ならずして、信大連句会にも劣らぬ連衆が出来上り、それらの方を

中心に猫養会が結成され、今年で十四年目に入っている。連句は昭和四十五年（一九七〇）ごろから文壇に復活したと言われている。昭和五十年ごろから入門書が輩出し、方々に会が出来て連句を楽しむ人が増え、急に賑やかになった。そして、遂にはそれらの人を集めて五十六年（一九八一）には「連句懇話会」が、まず作られ、六十三年（一九八八）には「連句協会」が結成された。

これは一面においては嬉しいことであったが、ひとつ困ったことがあった。それは「連句協会」の会長はじめ会員の多くの方が、私の連句とは全く異った連句を作っておられたことであった。私は連句というものは、付けと転じが最も大切だと芦丈先生から習い、それを今でも守っている。しかし、「連句協会」ではそれらはあまり問題にされず、例の自・他・場の区別も無視しておられた。

私は連句懇話会の時もすすめられて入会し、連句協会でも顧問になっている。しかし、私はどうしても納得が行かないので、連句協会とは疎縁だったし、また、昭和五十八年（一九八三）からは「季刊連句」を発行して、自説を主張し、そのためには他派の人の作品を批判した文章も書いて来たのである。

こんなことをやっている間に、停年から十四年が夢の間に経って、気がつくとい、私はいつの間にか教えて八十の翁になってしまった。もう十分である。これからは、人を教えたり、批判したりしないで、のんびりと相手になって下さる方は誰とでも連句を楽しみたいと思っている。

歌仙 花の盛り 捌 上月淳子

評 東 明雅

仰ぎ見る花の盛りの一会かな

弥生の空の淡き二藍

団扇張る路地に物煮く匂ひして

ブリーダーより届く若犬

夕月に人無きメリーゴーランド

そぞろに寒き己が靴音

葡萄酒を醸す男の髭の濃き

くすぐったいの初めてのキス

ぶかぶかの彼のパジャマがよく似合ひ

寝台特急闇を裂きゆく

大深度地下の工事も幾年か

玉鹽出て来て議論沸騰

懐手仏頂面の隠居殿

月光はじく鷹の瘦身

決闘の立会人もきめられて

のぞく模擬店幔幕のかげ

金賞を得たる盆栽梅古木

墓穴を出て眠き半眼

淳子

一恵

瑞枝

元子

遊

水壺

元

恵

遊

元

枝

壺

遊

壺

恵

枝

淳

元

発句と脇は神代植物園での花見の句、花盛りに遭うよろこびと感懐がこめられている。脇は打添付の典型。二藍は辞書によればやや赤みのある藍色。春の空のどこか艶のある色である。

第三 発句・脇の優雅さに対して俗なものを取り上げた。「団扇張る路地に」は、厳密に言えば句跨りであるが、「仰ぎ見る」と「団扇張る」は同型であるから、「団扇張り」とすれば、同型も句跨りも免れる。

四句目 ブリーダーは犬や猫を繁殖させる人。すでに日本語化している。軽い句で結構。

五句目 場の句、ブリーダーとメリーゴーランドは何か付味がよい。

折端 前句の「人無き」の寂しさを受けて、その気分に応じ深めている。打越からは一転。

ウラ折立 前句の自に対して他の句の向付。髯男の登場は恋句の誘い。この辺りの配慮も十分である。

八句目 「くすぐったいの」が前句の「髭の濃き」に呼応して、軽いユーモアもあり、裏の恋句としては上々である。

子^{ナオ}遍路のかかとを踏んでスニーカー

レゴ積み重ね小さき夢みし

これやまた下世話に馴れて冷奴

遠山脈を望む山荘

縁談の何故か途中で立ち消えに

何食はぬ顔ニューハーフとは

荒馬を御しそねたる医者通ひ

追っても追っても迫る雪鬼

北風辻音楽師悴みて

芥浮べつ川は流れる

アルジェリアカスバの塔に昇る月

水煙草のむ秋のうららに

ひとり居^ウにちんと打ちたる鉦叩

来世紀まであと二千日

松江なる八雲の旧居の人の影

お客様には薄茶差し上ぐ

舞ひ舞ひて天に還るか花の精

軽くはづんで春の小霰

平成六年四月七日 首尾

於 神代植物園

壺 元 恵 元 遊 壺 枝 同 恵 元 恵 壺 遊 枝 元 壺 遊 枝

十句目 前句のバジヤマから恋の情を取り去って寝台車
への見立替も鮮か。

十二句から十八句まで、ことに十三・十四・十五・十六
・十七・十八の一連は、これぞ正に武蔵と小次郎ではない
が一句一句、丁々発止で渡り合っている。連句のおもしろ
みはこんなところにあるのである。

ナオに入って、二十三・二十四・二十五・二十六、この
あたりも連衆と捌きの格闘が見られおもしろい。ちょうど
十九・二十・二十一・二十二あたりまでがやややおとなしく、
平凡であり、ウラのもり上りも一応静まっているので場所
としても適当である。ただ、ウラの十三から十八までと比
べると、完成度は劣っており、ことに二十四と二十五はど
ういう意味なのか付心も意味もはっきりしない。

二十六は「冬の旅」に出て来る魔王の面影であろうか。
二十七・二十八・二十九・三十はまた穏かになったが、
二十七の辻音楽師、二十九のカスバ、三十の水煙草と異国
めいたものが三・四句続くのが気になる。また二十九が「昇
る月」と夜の景であるのに、三十の付句が「秋のうららに」
といかにも白昼を思わせる景を付けたのは付味が悪い。

ナウ 三十一せっかくの場所であるから、もすこし述懐
の気分が出てよいのではなかるうか。

挙句 春の小霰は珍しいものを出したが、花の句がい
かにも和気霽々の春景色なのに霰はちよっといかが、ある
いは「春の小雀」位ではいかがであろう。

A・C・Cの連句実作を受持って 秋元正江

連句実作

A・C・C教室の連句実作を受持って六年目に入り、先ず人数がふえたこと、土曜日になったので若い人や男性が入ってきて教室は活発で自由な雰囲気溢れた。

二十韻「花踏んで」の巻は明雅先生に発句を頂いて一回の講義に一句の割でじっくりと進めた。常に即吟を心がけるとあるが、一句を作るのに使える時間は約十分、出来た人から集めた短冊を明雅先生と共に板書。多彩な付句が黒板所狭しと並び、その中から席の順に最初は気に入った付句（数句でもよい）を選んでもらう。つまり荒選である。そこで付句に意見がある時はここで討議し、もう一度見直して自分が捌きになったつもりで四十句余りから一句を選び、挙手でその集計をとる。これは句会なら互選の形式だ。ひとつの前句に対して、他の人がどのような付句をするかそれを何人が共鳴するかが一覽できるのだ。

この忙しい現代に、一瞬の脳細胞への刺戟を与える作業は貴重なひとときだと思う。また一句を選ぶことは、作るこ

二十韻 花踏んで 正江 朔

花踏んで年々歳々惚けにけり

目つむりて聴く梢の囁

新作の春の装ひ揃ふらん

カフェオーレをふたつ注文

川開き月読男一座して

金魚と呼ぶる仇な姐さん

真つ白に塗り潰されし塾の壁

並の人でも大臣の夢

琵琶とりて平家滅亡語るなり

バイク疾走山峡の道

切株にひよんな顔してまみだぬき

ふるさと思ひ湯ざめごちに

ブラジルも日本も祖国と片言で

酒場横町抱いてやる月

預けたる嬰に乳張って秋深み

くるくる回る団栗の独楽

明雅

清子

健悟

和子

あかり

文子

良子

良弥

豊美

庸子

よしえ

央子

蓉子

達子

麻子

弘子

とにましてむずかしい。前句との付味、打越との転じ、一卷の流れをみなければならず、一句としてはどんなによくても、とることが出来ない。

教室は発足以来十四年目に入るのだから、年期の入った方もいる。年数の違う人が一堂に巻くのは大変だと思われるかも知れないが、よくしたもので連句という座の文学は、式目が未だの新しい人は新鮮な発想、ベテランは新人をひっぱって二十韻の妙を奏でている。

一卷の中で通句という七名八体のひとつを使って新たな展開へ向かう句を入れてくれるのだ。バイク疾走山峡の道や、くるくる回る団栗の独楽、などはそれ迄の人情句のねばりをうまくかわしてくれたと思う。

発句の作り方

連句会に出かけるときは、実際はいらなくても嗜みとして発句を用意するように心掛けましょう。

次に会場には時間ぎりぎりにすべりこんだり遅刻をしないうこと、早目に着いて周辺の自然に触れるゆとりが欲しいのです。

着く迄の気象、季語に心を深めて、柔軟でみずみずしい感性を保つことが必要で、その心のためたいを切りとって発句に仕立てます。発句は挨拶だからといって、季語、切字を入れて事柄を説明しただけの安易な句にまとめないよう気を付けましょう。花を詠んでも風を詠んでも自分という人間の表現です。

※

掘り出され在りしまなる兵馬備 澄子

見上げる空に雲がゆっくり

正秋

桃桜いま満開と便りせん

淑代

茶碗に盛れる菜飯つややか

久美子

平成五年四月十日 起首

平成六年三月二十六日 満尾

於 東京朝日カルチャー四十八階教室

※教室で席題の選をするに当って、俳句として選ぶのか、発句として選ぶのかという質問がありました。それは勿論発句の条件をみたくものを選んで欲しいということに違いはありませんが、敢えて俳句としての芸術性にすぐれている句はそれを捨てざるべきではないと思います。佳い句を鑑賞することも実作の力をつけますし、その句のセンス、作り方を学ぶチャンスは失ってはならないのです。

発句は歌仙なら三十五句を引っぱっていく巻頭の句であり、発句と俳句は元は同じで俳句の作り方を知る必要があります。完全に独立して脇が付けられない俳句（つまり発句として成立しない）は、それを見分けるべきですが、逆に発句の条件をかたくなに狭い範囲にしてしまうと、発句は新しいものないありきたりのものになってしまいます。

発句の在り方を踏まえた上で、ことは、曖昧なはっきりとした粹のない所に美があるのです。かわたれどきのよいうな昼でも夜でもない天地の言霊が入れ替る一瞬のあわいを見つ、歳時記と好きな句集を読んで下さい。

A・C・C講義の一年 式田和子

「人の親、恋に容赦のなきことや」（室生犀星）

平成五年の四月から、朝日カルチャーセンターの連句教室のお手伝いをさせて頂けるようになりました。

このお話を承ったときは、とても私には荷の重いお話です。このお話で、とご辞退申上しました。それと申しますのは、私は入門以来十二年余りになります。私るときは一年ずつでございましたが、途中から半期春秋の入門となり、新しい方が年二回お入りになるようになりました。合計して数えますと、明雅先生は、連句のお講義を二十回以上も遊ばしていらっしやるわけになります。ただの一回も同じお講義はなさいませんでした。同じ「脇」でも「花」でも、あれこれと切り口を変えてお話をなさいます。そのご学識の深さ、広さは驚異と申上げては失礼ですが、驚くばかりでございます。ございましたから、とても私など……と、もう恐ろしくて仕方がありませんでした。

そこで、話は冒頭の室生犀星に戻りますが、これは、人

の親は自分の若いときの事は忘れてしまって、若い人の恋には容赦がない、ということ、人は兎角前のを忘れるが、思い出してはどうか——ということ、そこで私も、入門したとき、何が一番のネックだったか、そこを征服したら、山の登り口が見えてまた前へ進めるのではないかと考えました。私と一緒に入門された超々ベテランから、連句は知らないが面白そうだと入門された新しい方々と一緒にの教室での勉強ですが、連句でつまずく石は何かを探り探りいくより仕方がない——と、開き直って、実は内心ブルブルしながらの講義となりました。

お教室では正江先生が、続けて実作をなさいますので、先にする私の講義がすぐ続いている実作に役に立つようになくしては意味がありませんから、一句一句の進み方で次の講義内容を考えていくわけですが、脇・第三・四句目・月・花・恋のような決った演目のない平均続きのところへはこういう考え方のものを挟み込もうと考えました。

私が入門した頃、きょんと坐っておりまして、目の前を「打越し」とか「一直」とか「折端だから」とかの連句

用語が飛び交いました。他のお稽古事をしておりまして、その世界特有の言葉がありまして、それが自然に口に出せるようになれば、先ず一步は踏み出してゐるものだ、ということは身に沁みておりますので、ベテランの方々にはお目まだるいこととは思ひながらも、用語の解説を別に機械的にくくって扱ってみました。また、実作には、組立て方なども、初めに頭の中に入れておいて、その枠を知ってから出句をなされば、「これはもうナウだから採れないわ」などと捌きに云われることもなく、新人の方でも句を採用される率が高くなりますでしょうし、そうなりますと、ますます連句が面白くなられるのではないか、という考え方から、「一巻の作りの考え方」などとして取り上げてみました。

なにしろ私は浅学非才ですから、明雅先生のお講義のノートを読み返し読み返し、当日用の原稿をまとめておりますと、いかに自分が良い加減にお講義を伺っていたかを痛切に反省させられます。どうしてもっとしっかり一言一句のがさず伺っておかなかつたのでしょうか。悔やんでも仕方がありませんので、また力をふるい起してワープロに向うのですが、そういうときに限ってワープロまでがそっぽをむいて、ヘンな文字転換をしてくれたり。エエ、天は我に組せずか——などと古人の口真似をして嘆いてみたりの日々でした。

しかし、これによって、連句を最初から勉強し直すチャンスをお与え下さいました明雅先生に深い感謝を捧げるも

のでございます。それにしても連句は難しうございますね。いわゆる式目は暗記しても——しなくても、永年やっついていれば自然に身につくものと思ひますが、七名八体の付心の分類、実例。手引書通りに考えればそれなりに納得がいきますが、現在のように、単語に横文字も入り、言葉そのものも新らしくなつて来ますと、前句の句の味を読み取るのも時には考えてしまうこともあります。七名のほうにはかくれても、八体でどう分類したらテキストとして使えるかなどは、これからの私の宿題となりましょう。やはり、今の作品を併列して使わないと、若い方は少し異和感を持たれるかもしれません。連句そのもののメカニズムは、ちつとも古くなく、世界に誇る文芸として十分機能するものと思ひますから、この辺りをもう一度私は学び直さねばと思つております。

また、出て来る字の難かしさ。それが読めない書けない自分の不甲斐なさなど、いやというほど知らされた一年でございました。

お教室の皆様が、はたしてお分りいただけただかどうか、という不安も一年間ついてまわりました。ただ、私も入門して長い間、分つたと思つていたことが本当は分つていなかったことがやつと分るこの頃ですので、どうかお気を長くお持ち下さつて、ご一緒に勉強してまいりましょう。

いつも明雅先生がついていて下さいますから、頼りない船頭でございますが、大船に乗つたお気持でいらっしゃるよう、今後ともどうぞよろしくお願い申上ます。

「灰汁桶の」の巻鑑賞 (VI)

東明雅

柴さす家のむねをからげる

去来

冬空のあれに成たる北風

凡兆

(現代語訳) 北山から吹きおろす風が烈しくて冬空は荒れ模様になって来た。それで柴でさしかためた棟をすっかり結んで、冬構えをしている。

(付心) 屋根の修繕を北風の荒れに備える為とした。心付。天象の付け。前句の「むねをからげる」の語気に、あわただしい俄か繕ろいの様子が連想されるから、暴風の趣きを付けたが、それも冬空であるだけに、一層きびしい気分が募る。

(転じ) 打越の惜春の情が一転して、冬のきびしい気分となっている。

(補説) さきに、

鶯の音にだびら雪降る

凡兆

乗出して脰に餘る春の駒

去来

摩耶が高根に雲のかゝれる

野水

の付合を説明した時、これは三句がらみで全く転じがないと評した。

かへるやら山陰伝ふ四十から

野水

柴さす家のむねをからげる

去来

冬空のあれに成たる北風

凡兆

この付合も中に人情の句を、人情なし(場)の句で挿んでいる点は、前の例に同じであるが、打越・前句が余裕ある人の春愁・惜春の情であるのに対して、前句・付句の場合には、前句を春祭りの頭の家から、冬に備えて俄か繕ろいをしなければならぬ家へと見立替して付けた為に、同じ人情なしの句でも、変化・転じが効いているのである。

冬空のあれに成たる北風

凡兆

旅の馳走に有明しをく

芭蕉

(現代語訳) 冬空が荒れ模様になり北風が烈しいので、旅人のせめてのもてなしに、主人は一晚中、灯をともしおいてくれた。

(付心) 前句空模様を述べた場の句から人情の句を付けて来る起情の句。三冊子に「馳走の字さびあり。荒れになりたると心のしをりに、旅亭のさびを付けて寄するなり」と

ある。旅の空が荒れ模様になって心配する旅人のわびしさ・あわれがひびいて、旅亭のわびしさ・あわれとしての馳走（一晚中、灯を点してサービスするだけしか出来ない）で相応じているのである。もともと「馳走」という言葉にはさびというものはないのであるが、前句に応じたその内容（食事や寝具で十分歓待できず、せめて夜中、点燈することによってサービスするという貧しさ）に、新しいわびしさとあわれが見られるというわけである。

（転じ）打越は屋外の作業で自の句であるのに、この付句は室内で自他半の句。

（補説）「有明しをく」有明しは一晚中通してつけておく燈火の總称で、枕頭にともす「有明行燈」や、台所に吊って用いる「八間」なども、終夜つけ通す時は「有明し」という。ここは現在の電気スタンドにあたる「有明行燈」である。江戸時代は燈油が高かった（この巻脇句「あぶらかすりて宵寝する秋」参照）ので、安宿では「ありあけ代」と言って、有明行燈にともす燈油代を請求することもあった。ただ、樋口功・折口信夫・伊藤正雄などの諸氏が説いておられるように、「旅亭と見るよりも荒れに降りこめられし民家にて一夜を頼みし趣と見る方、余情深かるべし……」この宿を旅亭と見ないで、普通の家とする方が余情が深いように思う。

この句のすばらしさを説いた先人の二つの説を紹介する。旅といふ一字で、前句の荒寥の世界を一転して、風味の世界とした技術も非凡であるのに、「馳走」と曲に出て、

前句の題材を一括に手際よく旅宿の風情の中のものとした心ばせは、殆んど神逸の技と云ってよいやうに思ふ（太田水穂「芭蕉連句の根本解説」）

此句は動後の静を描いてゐる。「冬空のあれに成たる北風」といふ動中の動を受けて、下手な人が付ければ、ここで前句の烈しいあふりを受け、動の句を出すと思ふ。その結果がよくゆくかどうかはわからないが、それを芭蕉は、静の句で受けとめてしまったのは、さすが非常に手腕を思はせます。しかもその静の句は、いきなり食ひ止めるのでなく、そろそろと緩和しながらここで押へてゐる。「旅の」ではまだ動いてゐるのですが、「有明しをく」で夜更け万物静かになつた落着いた気持が出て来ます。実に美事な付方です。（山田孝雄、芭蕉誹諧研究）

旅の馳走に有明しをく

芭蕉

すさまじき女の智恵もはかなくて

去来

（現代語訳）旅亭の女が旅のもてなしとして有明しを置いてやり、男を待ったが、その女の智恵もむなしく、興ざめた結果となつた。

（付心）其人の付け。これは旅籠屋女、出女あるいは飯盛女と呼ばれる者たちの恋の手管を詠んだものである。

（転じ）前句の旅のもてなしをきっかけに、恋句に転じた。（補説）「すさまじ」はもとしらじらとした不快感・興ざ

めの感じで、季節感はなかったのであるが、鎌倉時代の頃から寒さ、冷の感じをもつ事になった。「花花草草」は八月、

「毛吹草」は冷・暮秋としている。「御傘」には「すぎき心の句も秋に用べし」とある。この句の典拠としては「徒然草」一〇七段の次の文章があげられている。「ふかくたばかりかざれる事は、男の智恵にもまさりたるかとおもへば、その事、跡よりあらはるゝを知らず。すなほならずしてつたなきものは女なり。……もし賢女あらば、それものうとく、すさまじかりなん」。さらに「枕草子」二五段の「すさ

まじきもの」の段も、かなりポピュラーで、人口に膾炙されてきているため、何かこの語には古典的なイメージがまつわりつき、たかが、飯盛女の恋の駆引きを叙する言葉としては、ややオーバーな感じがする。
また、すさまじき・はかなくてと、抽象的表現のみに終始しているため、この女性の実像がちつとも読者の脳裡に浮かび上がって来ない。

教室での発句習作 (五頁の続き)

正江選

発句 席題

花冷え・藤椅子・熱帯魚・炎天・新宿・その他

秋

残る蠅新宿警察検問中

障子張る我ら新宿三世代

父呼びし内藤新宿望の月

別々に生きし三十年ぬくめ酒

ひとり酒奔流となる虫のこゑ

秋晴れに酒気残るかな鬼瓦

火祭や巫子の捧げる新走り

冬

短日の実朝の海波すさぶ

雪婆豊の波をわたりけり

嫁ぎゆく姉は泣かずよ雪兎

チェホフの女なくなり冬薔薇

大寒に北の習ひの素肌かな

冬の虹つぎのひとこと待たれをり

春

あやにやしをとこをみなも花の冷え

鳴り出でしからくり時計花の冷え

夏

荘売って藤椅子ひとつ引取れり

市役所の大きな窓や熱帯魚

脇道の古書肆の棚や熱帯魚

さくらんぼ少女ら椅子を引寄せて

友来り白める朝のさくらんぼ

炎天や坂また坂の切絵集

炎天やひよろりと出でし街静か

炎天や指二つ折る用の数

央子

恵美子

徒子

清子

嫺

狷之介

守英

豊美

紀子

あかり

豊美

嫺

あかり

弘子

央子

政志

シズ

光子

淑代

健悟

達子

失名子

清子

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第四十九回 猫蓑会

第四十九回猫蓑会は四月二十四日(日)、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと二十韻十二巻を首尾した。今年は特に賓客として、小林しげと・中尾青宵・名古則子・宮下太郎の各先生をお招きし、出席者六十五名の盛会であった。

第一部 正式俳諧興行 夢想披き俳諧「梅の若枝」
 第二部 二十韻十二巻

(一) 役割

宗匠	中川哲
脇宗匠	豊田好敏
副宗匠	今宮水壺
執筆	佛淵健悟
知司	権頭和弥
副知司	佐藤良弥
座配	峯田政志
花司	秋元和彦
配硯	中川凡
同硯	北村良輔
老長	杉江杉亭

(二) 次第

一	席改め
二	席入り
三	配硯
四	献花
五	執筆登場
六	文台捌き
七	知司挨拶
八	俳諧興行
九	花前
十	玉串奉典
十一	花の句披露
十二	端作り
十三	吟声
十四	文台返し
十五	作品奉納
十六	知司挨拶
十七	退席

夢想披き俳諧

二十韻 梅の若枝

捌・文中川 哲

かふたちてさかふる梅の若枝哉

百千鳥鳴く園のひろびろ

盛りつけん鯛の浜焼大皿に

児らから貰ふ折紙の舟

夕立に山洗はれて月昇る

浴衣の君の白き襟足

残り香をそのまま歩く長廊下

患者も選ぶ好きな先生

傷つきし犬が宿舎の前ををり

コーラン唱へ伏せる凍土

寒昂^{オホ}仰ぐ宰相明日知らず

人口よりも多き拳銃

ジ・エンドのシェーンカムバック耳にあり

後添へのきて熟れる秋茄子

月光を頼みてしのぶ園の内

したみ酒する甕のどびろく

七十は稀にあらずとクラブ持ち

携帯電話なほもスリムに

花万朶古城を守る龍頭

池をめぐればうららかな昼

御 明雅 水壺 杉亭 和弥 好敏 政志 麻子 良弥 和彦 文子 弘子 美津 紀子 良輔 智恵 凡 照子 哲 執筆

ことは菅公生誕千五十年を記念しての藤祭に参加しての、とりわけ意義深い正式俳諧に宗匠の大役を仰せつかって、そぞろ身内の震える思いであった。

菅公といえは先頃歿った十三世片岡仁左衛門絶世の名品といわれる「道明寺」の佛が深く印象づけられている。松島屋を気取るつもりはないにしても、宗匠といえは、気品と貫禄が嘘にも欲しい役どころである。

ましてや今回は猫養会のもの優しげだが、強い個性と知性に裏打ちされた男性諸兄総出動、顔見世舞台での照れっぱなし、あがりっぱなしのお恥しい有様をご披露したことと悔いるばかりであった。

それにしても明雅先生の一步も戻らず、先へ先へと進む創造力にはまったく兜を脱いでしまう。

かふたちてさかふる梅の若枝哉

この菅公の神の夢のお告げの句を発句としての「夢想披き俳諧の連歌二十韻」の花の句をつけろ、といわれるのはなんとしても重荷であった。道真公だの人丸だのの神様の立句を受けて「花を持たせていただく」光栄は有りがたいことであっても、どう付けたら良いのか。さんさん迷った挙句、脱いだ兜を神前に供え直しての愚句でお茶をにごさせていただいたものの、先生も意地が悪い。それにしても昨年十月宗匠本役の隆秀氏が体調を崩したための代役ということ、私にとっさいさか気を案にしてくれた。仁左衛門の代りを伴の孝夫が勤めたつもりなど言っっては御贔屓筋から文句が出るかもしれませぬ。まずはほっとしているところです。

膝送り 藤咲くや

白 藤

市野沢弘子 捌

藤咲くや正式俳諧二十韻

諸礼停止と歌ふ鴛

紙鳶尾をひるがへし遠山に

親子よく似て長き鼻筋

中国が好きでまた行く月の頃

柄の大きな竈馬ゐる

ぬくめ酒焼木杭に火がついて

産後の乳のはり来るを抱き

くらがりに冷房音のひびくのみ

虎が雨降る仮住の寺

あらはれて里を騒がす海坊主

核弾頭はこちら向きをり

新総理尻っぴり腰は困ります

ブレンド米の鮭はいけるぞ

湾岸の夢の架橋寒の月

いそいそはじむ春の支度を

アメリカンショートヘアを去勢して

人生およそ実には凸凹

うぶすなの神は今年も花吹雪

耕す土に力漲る

太郎

明雅

しげと

則子

青宵

郎

雅

と

則

宵

徒司

郎

雅

と

則

宵

郎

と

雅

則

白藤に重なる藤の濃紫

亀の甲羅の乾く春昼

若布腕懐石膳へ差し出して

なにかと言へばすぐにメモ取る

山の宿月の涼しく語りつき

浴衣にかくす豊かなる胸

ファックスで送る恋文キスマーク

ホームレス猫やって来る頃

連立の首班指名にのりそこね

有髪のまま開く仏典

雪達磨宅急便で美幌より

サッカーを見る病室の子等

カラオケのラストはいつもデュエットに

そぞろ寒さに強く抱きしめ

鹿垣の鍵を確かむ酔の月

黄落の下思ふ来し方

再びの職は離島の定期船

みんなにここに記念写真を

花大樹大社づくりの古社

気流にのりて鳥雲に入る

弘子

淑子

惠美子

徒司

照子

よしえ

照

惠

淑

同

惠

え

淑

え

同

照

淑

惠

淑

照

藤の揺れ

久保田庸子 捌

藤の風

倉本 路子 捌

水かげろふゆるりと藤の揺れるたり

画眉鳥とべる晴れ初めし空

春障子おはじき遊び節つけて

ミックスジュースぐいと飲み干す

Jリーグ負けた試合に月高く

送り火の中交す約束

道行きの影追ひすがる秋の蝶

国立劇場変る出し物

信州にはじめて宰相生るるや

ちよっとよれよれアルマーニ着る

ワンルームマンションかつと大西日

此の頃麦酒箱で安売り

奪はれしあとの唇ふるへつつ

逃げの早さは魔女であるかも

寒の月山に囲まる深き湖

何を夢見る陸封の魚

雨洩りのエアフロート我慢して

貧しき民もなつかしき友

穏やかに花の下なる老夫婦

仔猫甘えて寄りかかりくる

庸子

麻子

達子

杏奈

和彦

同

奈

達

麻

彦

達

麻

奈

達

麻

達

彦

麻

奈

同

撫で牛の鼻つやつやと藤の風

春深みゆく襦袢の杳音

到来の浜飛魚を調理して

重ねられたる染付の皿

藍浴衣三面鏡に月あまた

また逢ひたくてミツコたっぷり

片言で極秘情報洩らす聞

すったもんだの続く政界

一右肩をあげてひとりで生きてゆく

アルコホリック・ワーカホリック

麴町赤坂麻布六本木

冬の苺の並ぶ店さき

Vサインラガー喜びオーバーに

ルンバのリズム聞きつコーヒー

寝待月待たせ待たされ忍ぶ恋

泣く泣く別れ後の出代り

秋江の通学船にクレヨン画

雀がちよんちよんハチローの歌

塩の道小さき仏とおらが花

文鳥を手に余生のどらか

路子

志げ子

杉亭

かりん

守男

淑代

同

路

ん

代

亭

志

同

男

志

亭

志

ん

代

男

藤浪に

桑原 美津捌

藤の花

坂本 孝子捌

藤浪に酔心地なり太鼓橋

音もなく飛ぶ蛇の行く方

春暖炉ドミノをせんと集ふらん

堅焼煎餅割ってほほばる

夏場所の織はためく月の下

衣を更へて胸のふくよか

スチュワードス見合写真のうづ高く

挨拶されて名前ど忘れ

雪舟の佛蘭西銃置く望岳亭

旅の半ばに仰ぐ寒雁

一応はパンナコッタも食べて見る

政策協議いつ果つるやら

喝采の操り人形すぐ退場

ふれ合ふ度に夜来香しむ

織月の閨のささめきいつか止み

新酒そそげるペア・タンブラー

ホスピスのボランティアするクリスチャン

次々浮かぶ顔のなつかし

瓜坊の檻にふり込む花吹雪

濃き薄きあり山笑ふ頃

美津

久美子

啓世

凡

美奈子

同

久

凡

世

久

世

凡

同

奈

久

世

久

凡

世

奈

亀戸や店の飾りも藤の花

獨活を井桁に積める軒先

耕耘機盆地の畑にあやつりて

サッカーファン子供等はみな

留め石に雪うつすらと初月夜

鏡の前で選ぶ口紅

逢ひに来る乳房のあはひ十字揺れ

面会謝絶の札の斜めに

酒煙草控へ待つのは首相の座

ハングライダー鷹を追ひ越す

サングラスかけていつもと違ふ街

3+3が5にも7にも

兄の恋どんとおいらが引き受けた

愛する故に泣いた道化師

月光を容れて古城の窓高く

あきつ湧き立つ山の巖より

鱈の丼母の味にして

点字たどれば遠きサイレン

振り上げて花よめ組の纏持

拾はれて行く路地の猫の仔

孝子

遊

欣二

志乃

八千代

二

乃

同

遊

同

代

同

二

遊

乃

代

同

乃

子

遊

藤 祭 り

真 田 光 子 捌

藤 浪 や

須 田 智 恵 捌

引き当てしにくじの吉や藤祭り

ふうせん持ちて渡る朱の橋

猫の仔をポストカードに作るらん

アップルティーの香りまろやか

月涼し豪華客船汽笛鳴る

くらげのごとく君に抱かれて

「ついて来い」こくりうなづく細うなじ

郎党の数足りぬ口惜しさ

風巻きて鳩いっせいに飛び立ちぬ

セントポールの青銅の屋根

鉤鼻の老婆もの乞ふ道の凍て

灯のにぎやかに豆撒きの声

別れたのくつついたのと週刊誌

新しき閨処女の振りする

窓開く指にやさしき月の影

折り紙切って糞虫の糞

ぬくめ酒むかしは眠狂四郎

県人会の訛なつかし

葉師の湯下駄音ひびく花の坂

初虹かかる山の稜線

光子

淳子

千恵

道子

隆秀

恵

淳

道

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

淳

藤浪や襦袢は袂をひるがへし

籬伝ひに鳴ける頬白

春スキーワックスうまく掛けおへて

煮込みの蓋を少しずらせる

塾帰り近道をぬけ凍る月

雪坊主にもちよいとちよっかい

君が好き君の鎖骨がもつと好き

上る西入る京の古地図

三高の紅もゆる丘の歌

宰相の椅子すぐに組立て

浮いてこい底つく株も悪智恵も

いっきに呷る冷酒の酔

シヤム猫はカウチの上に夢淡く

霧のとぼそに消えしマタハリ

書割の月に眩しき膝頭

踊浴衣のままにもつれる

早まって離党の人も氣勢挙げ

育児書どほり行かぬ子育て

公開を許さぬ庭に花万朶

右に左に飛べる姫蜂

智恵

清子

好敏

好敏

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

藤まつり

長崎 和代捌

宵の雨

峯田 政志捌

たもとほる江戸百景の藤まつり

囃子太鼓のひびくのどけさ

春暖炉バードカーヴを習ひゐて

香り豊かに淹るる珈琲

宵月の濃くなりそめし楨の梢

逢瀬の宿に小牡鹿のこゑ

検問に身をずらし合ふそぞろ寒

国際線の飛行機が発つ

食べ方の工夫楽しむ混合米

曼陀羅織れば文が綾呼ぶ

シッキムのバザールにゐる両替屋

かみきり二匹箱にしまふ子

見返れば我が初婚紀元前

雪女郎佇つ流し目をして

風邪薬口移しする月の窓

大漁船に挙がる歓声

有線のベストテン入りするが夢

はげむジョギング老を忘れる

御衣黄に鬱金関山花万朶

青空高く勝風ナウの舞ふ

和代

郁子

紀子

文字

水壺

文

壺

郁

文

壺

紀

同

壺

郁

文

郁

紀

文

郁

紀

宵の雨浄めあげたり藤祭り

籬がぐれに鳴ける頬白

油絵の春季講座を楽しみに

パエリアの具のいろいろなこと

政権の決まりのニュース空しくて

雲間漏れたる月に逢引

着る前にふと抱きしめる秋衣

谷戸の奥処に修す遊行忌

あれよあれ三度飛脚の足運び

けふも動かぬ亜米利加の船

読みさしの本がぼとりとハンモック

木下闇に光る両眼

賑やかに花嫁迎ふ狐どち

お立ち台止めラブホテルゆき

汗拭ひ月を肴に「柳影」

立行司にも迫る定年

老指揮者地軸ゆるがすブルックナー

湖畔に影を落とす王宮

あけぼのに万朶の桜紅重き

蜂がはたらく庭に出てゆく

朋夢楼

健悟

妙

悟

妙

代

楼

代

楼

代

妙

楼

代

楼

代

妙

悟

*みりんを焼酎で割った酒の美称

歌 膝

村田 富美 捌

藤 の 香

山崎 一恵 捌

歌膝の吟声いよようららかに

はじめて座る藤の連衆

しゃぼん玉欲しがる子らと連れ立ちて

飼主引きていさむ若犬

嵐山髪洗ふひと月浴びつ

冷酒ふふみ恋の原稿

整軒看板の古寂びぬ

ユダヤ人街公園の脇

ダイヤルと暗誦番号合はせをり

横溝正史終りから読み

虎落笛食卓いつも饒舌で

冬薔薇提げて遠来の客

きずついた過去は許してもらへない

また邪魔者の気障な妖精

十三夜水族館の回遊魚

米つきばったで過ぎた生涯

ゆく秋の老いが最も凜々と

よろひ仏を見せる大伯父

花衣下戸ならばまた生欠伸

雲雀のあがる広き草原

富美

健

哲

元子

良弥

正江

子

同

江

弥

哲

健

江

哲

江

哲

弥

美

健

弥

藤の香の満ちて御社鎮もれり

かぎろひの中巫の緋袴

甘味噌に鱈の切り身漬けるらん

あれこれ語る友の消息

強力の挨拶しつつ峰渡る

桶にビールのひえてゐて月

みよがしのストリップの熱き胸

子供服干すとうさんは家

存分に嫌煙権を主張して

「天然水もう滑れます」

初市の夢売るひとは鸚鵡抱く

ビルマにて聴く豎琴の音

人面の浮きしねぶとに惱まされ

吸ふて呉れたるをんな冷まじ

閨の月情念の火の燃え盛り

骨尖る老ふらり衰虫

サーカスのジンタ追ってる僕がある

パステル持って町のスケッチ

花溢れ空に絹雲漂ひぬ

お玉杓子がかたまりし池

一恵

洋一

和子

克子

和弥

和

洋

同

弥

克

同

和

洋

和

弥

和

洋

弥

克

弥

執筆の役を終えて

佛 淵 健 悟

四月二十四日、亀戸天神社藤祭り奉納俳諧の当日、太鼓橋を渡り、いつものように撫牛に挨拶に行きました。私流のうらないで、この天神様の牛がコワイ目をしていたらその日の連句は難儀する、やさしい目をしていたら大変よろしい、こうなっているのです。以前、初めて捌きを仰せつかったこのことをした時、闘牛のような目にはじかれ、撫でる気分でなかったのを覚えています。

この日撫牛は、思いもかけない柔和な顔で、第一関門をホッと通過しました。

正式俳諧の執筆という重い役目を引き受けることになって一年近く、個人的にもいろいろな出来事がありました。この勤めのことはいつも念頭を離れない課題ということになりました。本番までの長い待機期間がありますので、この間無事に過ぎませすよう、また綱の切れた牛になってしまわないうよう（牛年なものですから）、自分なり

に自戒や苦心もありました。ヒマな時は独吟してみようと思ひ立ち、百吟など始めました。言うなれば、連句お百度、です。それから、コースに出てポールが当たたらどうしようとか、なんだかこちらは消極的になってしまい、付き合ひの悪い男だと思われたかも知れません。藤祭りの直前には北野天満宮へも出かけ、正式俳諧の無事を祈念しました（ここには撫牛が沢山おります）。

そんなことをしながら本番の日を迎えることになりました。自分に言い聞かせたことは、所作に拘泥して窮屈にならないよう、藤房を揺らすそよ風のような心持ちで、というものでした（贅沢な願いですが）。お客様や、明雅先生、猫衰のご連衆、そして天神様に、感謝の気持ちで勤めよう、それだけを念じました。

正式俳諧は、宗匠、脇・副宗匠、老長、知司、副知司、花司、香元、配硯、座配、座見、そして執筆と、どれも他にかわれない重要な役割で出来ていて、式当日、万全の状態で臨むというのは多くの人の気持ちがあ揃わなければうまく行きません。これが可能になるということに、形を変えた連衆心のあらわれを見る思いがしました。

宗匠の「執筆、執筆」という呼び出しに促され、文台をささげ進み出てゆく時の身の引き締まる瞬間は忘れることはできないでしょう。それからの進行は雲に乗っているような気分でした。一時間の奉納俳諧が無事に終わり、明雅先生が安堵のお顔で「有難う」とおっしゃって下さった時は一年間の心配がいっぺんに報われた気がしました。

去年十月には、芭蕉忌正当三百年を修する正式俳諧の執筆も勤めさせていただきました。このような大切なお役を与えていただき、一生の光栄と思っております。

茶の方に、独座観念というものがありません。お客を見送って後、静かに余韻を味わいながらその日のことを反省するという意味です。私もまた奉納俳諧の豊かな経験をゆっくりかみしめたいところですが、実は行事が終わってポーツとしているのが真相です。しかし、伝統の重みは随分先になって、ジソワリと利いてくるのかも知れません。

明雅先生、お世話になりました猫衰の皆様、お役の方々、心からお礼申し上げます。

馬追

付勝練習二十韻

東明雅

ふるさとや馬追鳴ける風の中
撫子残る月代の道

秋深し篆書一幅書上げて

ゴルフのクラブ磨く縁先

向ひ家の大戸を開き婚の使者

黙しがちなる娘の髪を結ぶ

何もかも洗ひ流して夕立去る

付

治定 祭法被の匂ひ立つ紺

佳作1 キャンプさざめく磯の松原

同 2 初解剖のインタン生

同 3 神田祭の神輿もみあげ

同 4 刑期を終へて戻る友あり

同 5 瑞の浜木綿群るる島裏

同 6 白砂敷きつめ社まはゆき

同 7 峰入り修業法螺貝を吹き

同 8 藍の香ほのか浴衣新調

同 9 三社の御輿香港へ渡御

同 10 土間に置きたる瓜の芳醇

同 11 喉ごしのよき冷やし素麺

秋桜子

達子

よしえ

遊

和弥

文子

美子

敏子

スエ子

守英

紀子

妙子

一火女

鋭太郎

遊

研三

文子

美子

智子

※2 これは雑の句、尤も雑の句でも構わない。内容はとても珍らしい現代性を持ち、おもしろい句である。ただ、打越の気分といささか通うものがありはしないか。

3 神田祭の勇み立つ気分と、夕立のさつと上がった爽快さはよく付き、打越の気分からは全く転じている。

4 一切を洗い流したというところに付けたものであるうが、打越の気分からは転じていない。

5 浜木綿は晩夏、みずみずしく美しい浜木綿が群れる南の島。場の句であるが前句によく付き、転じもある。

6 これも5と似た場所か。潔らかな気分は前句によく付いて、打越からは転じている。

7 峰入は三夏、修験道で山伏が大和吉野郡大峰山に入りする行事。3とはぼ似た付味と転じである。

8 新調の浴衣にはのかに残る藍の香、よい所に目をつけられたが、表現がすこしおとなしすぎるのではなからうか。

9 三社祭は浅草の祭、神田祭にまけず勢がよいから、その点はいいが、香港へ渡御は蛇足であろう。

10 夕立のあと、土間においた瓜が甘い香をただよわせている。鋭い感覚で前句によく付いているが、何かあまり転じ得ていない。

11 夕立のあと、冷たい素麺をすする気持のよさ、前句によく付いており、転じも十分である。

12 夕立のあとはよく蝦蟇が這い出してくるものである。前句によく付いているが、気分の上での転じがない。

13 霞切が夕立の晴れをよるこぶかのように行々子行々

同	12	のそりと出て虫を吸ふ蝦蟇	道郎
同	13	行々子行々子と騒ぐ葭切	信子
同	14	柝の角から呷る冷酒	忍
同	15	昼寝の人の白きあしうら	ひろみ
同	16	馬面剥 <small>うまづめ</small> が釣れさかるなり	龍生
同	17	辣蕪 <small>らくわ</small> の瓶の匂ふ物置	三夫
同	18	草矢放 <small>くさや</small> つて土手を行く兎ら	康代
同	19	佃祭 <small>いんまつり</small> の宵の賑はひ	照子
同	20	蒼朮 <small>そうじく</small> を焼く午後のひとつき	

(受付順)

前句は夏の場の句、打越は雑の自他半の句であるから、付句は自他半以外の句なら何でもよく、また、せっかく夏が一句出ているのであるから、もう一句位、夏の句を出す方が、全体のバランスから見て具合がいいのではないだろうか。また夕立は三夏であるから、付句は三夏の外、一応、初夏・仲夏・晩夏どれでも使える。1のキャンプは晩夏である。夕立は一応三夏とは言え、やはり晩夏のころが最も多いだろう。その点で時季的にもうまく合っているし、打越あたりの何か沈んで気分からも転じ得ている。 ※

★新刊紹介★

猫 蓑 作 品 集 IV 千八百円

今年の猫蓑作品集IVは収録の数も多く、また、源心という新しい形式の作品も入って、参考になることが多いと存じます。多数の御購読を期待します。

子と鳴き立てる景もよく見るところである。前句にはよく付いているが、打越の黙っている娘と、あまり正反対なものかがであろう。

14 これは11と同じような狙いと効果の句である。

15 昼寝は三夏、付味は悪くないけれども、あしうらが打越の髪と差し合う。

16 馬面剥うまづめが釣れさかるなり、夕立の霽れたあと、急に馬面剥うまづめ(皮剥かわむの一種)が釣れ出して来たというのである。

皮剥かわむは三夏。おもしろいが、馬面剥うまづめの馬が発句の馬追とさわるのである。

17 10の句と同工異曲であるが、10の方がはるかに丈高い。

18 草矢も三夏の季語、堤防の茅草を抜き取って飛ばす子供の遊び。よく見かける風景である。

19 佃祭いんまつりは仲夏。3と似ているが、3の方が勢がある。

20 蒼朮そうじくはオケラの根を乾かしたもの、これを焼いて湿気を払う。仲夏の季語。

治定の句 一見8の句と似ているが、表現の工夫で、句が生きている。三社祭とか神田祭とか佃祭とか言わないで、その勢を描いているところがよい。

百韻

麗かや

坂本孝子捌

初折

麗かや松に八十路の翁ぶり

雪解零にふくらめる杏

地下厨房田楽味噌をねるならん

社会面から聞く新聞

誘はれて久々にゆく音楽会

巻き毛の犬のおとなしく待つ

雉鳩のくるくるぼうと眠る月

原稿用紙買ひしやや寒

秋袷手織もめんを好みける

サーカスの来て活気づく町

友達になりたき少女ロシア人

青年の船恋を満載

円高の還元雀の涙ほど

寒の施行にホームレス訪ふ

ラーメンのなるとの渦のほのぼのと

氣付け葉は酒が一番

月明り浜木綿つよき香を放ち

サーフボードを干せる裏庭

孝子

瑞枝

好敏

みづゑ

雅代

遊

健悟

同

ゑ

遊

敏

代

枝

同

遊

代

ゑ

枝

牛売って父の繰り言続くなり

嬰の泣き声を持って余しつづ

バスの窓触れて揺らしぬ返り花

山積みにしてキムチ漬け込み

二の折

衣を打つ漢江の空雁渡る

月照る夜もめざす大検

珈琲の香りさやかに呼ばれをり

マフィアのボスの別の顔見せ

占ひも自らの死は外すらん

雨あがりけり市の立つ朝

ほととぎす蔵の中には和じるしが

エプロンの紐とけば素裸

メリケンの領事の言葉語尾甘く

移動電話を売りこんで来る

いつからか行列がでる食ひ物屋

五百羅漢のみな何かいふ

宇宙より望めば蒼し水惑屋

白鯨追ひし老人の海

悟

敏

遊

敏

枝

ゑ

枝

悟

代

敏

代

敏

遊

悟

ゑ

悟

敏

敏

遊

病院の呼び出し状がぐる師走

郵便料の追加分貼り

パリコレを見てから旅はミラノまで

女兵士の落ちぬ口紅

その上の巴御前の情哀れ

小さき社の夏神楽なり

人徳で推されし人も立つ選挙

ちよつと蹟くエスカレーター

冬休み贈り物買ふ街の月

面影橋に殖える狐火

配られる重ね硯のしづしづと

塩せんべいを噛んで春愁

民家園前は花につつまれて

仲直りして遊ぶふらここ

三の折

画用紙にかく初富士と飛行船

EC統一しばし凍結

葉売り鞆に犀の角隠し

視線合はせぬ水揚げの宵

悟

代

敏

同

代

枝

悟

代

子

枝

遊

代

敏

遊

悟

悟

代

悟

敏

岡焼きでむしり取ったるアデランス

ボリユームいっぱいタンホイザーかけ

世紀経し早稲田古書房喫茶室

明治の気骨後ろ姿に

菖蒲湯を豊かにこぼし松風呂

雷除けの三角の札

オフロードバイクはゴビを真つ直に

さまよふ民は墓を持たざり

蓑虫をなぜ鬼の子と言ふならん

月の光の濡らす庭下駄

モンブラン今年の栗を裏渡し

仕事仲間の前は奇術師

死亡説流したあとの鼻整形

身過ぎに綴るひとの恋文

兄さんと呼ばせて夜はひとつ闇

かーんかーんと遠火事の消え

宝くじここの売り場がよく当る

試してみれば甘口の酒

オーディションすこしあがつて月おぼろ

宗谷岬は流水の頃

触るる手に仔馬のつむり脈打って

目尻の皺の深く笑ひぬ

花火師の夢七彩に咲き乱れ

御祭礼には届く梨瓜

敏

枝

敏

敏

悟

遊

悟

代

敏

遊

枝

悟

代

敏

悟

遊

枝

代

悟

代

遊

敏

枝

悟

名残の折

山蛭のぼりと落ちてけものみち

アラブゲリラの覗き合ふピラ

片ピアス灯影に銀の細工売り

掏っては貢ぐ情婦気取りで

愛の巢は各駅停車徒歩五分

じゃこ噛みかねてかじけたる猫

読み初めの枕草子手ずれして

式部官にも迫る定年

テロップの臨時ニュースを流しをり

オリンピックがこの村に来る

竹人形小刀細くけづり出し

吾を生みし母写真さへ無く

僧坊の寝覚めに仰ぐ月ほのか

きのふは雀けふは蛤

宮につけて頂く赤い羽

クラスメイトと手話でさよなら

百万の灯のそれぞれに人暮らし

到着機まだ旋回をする

闘争の昔も今は懐かしく

煮豆気長に味のしむまで

舞ひ給へ謡拙くも花の本

水あたたかく群れて寄る鯉

敏

悟

遊

代

同

枝

敏

代

遊

悟

代

遊

代

敏

同

枝

遊

枝

敏

代

子

遊

平成六年三月七日 首尾
於 緑華亭

連衆

大窪 瑞枝
豊田 好敏
山口 みづゑ
龍川 雅代
雜賀 遊
佛湊 健悟

「季刊連句」に左の方々より、御芳志をいただきました。
有難くお礼申し上げます。

一金 三万円 小出 きよみ 様
一金 一万円 鈴木 春山洞 様
一金 一万円 加藤 K 様
一金 五万円 猫 蓑 会 様

源心 ものの芽

東 明雅 捌

歌仙 骨酒に

秋元 正江 捌

歌仙 朝寝かな

坂本 孝子 両吟
式田 和子

もの芽のほぐれそめたる路地住まひ 水壺

門を出づればやはらかき東風 淳子

放ち鮎バケツの水に揺られるて あかり

先生の手をうばひあふ子等 雅辺

ひめゆりの塔に集まる月今宵 千恵子

想ひ告げんか利酒の酔 清子

碧い眼の男がかこつそぞろ寒 明雅

そひ寝の猫が鼻をひっかき り

摩訶不思議米があるよでないやつな 同

出入りもならぬクラインの壺 壺

放埒が過ぎて勘当される親 千

峠の茶屋に羽抜鶏駈け 清

夢に見し花火のひらくひとり旅 同

オランダ船で町の賑はひ 壺

みどり児の幼児洗礼^ナビーカープー 淳

持重りする里のお土産 同

顔見世の鼈肩役者の名入り椀 千

低き家並を比叡風吹く 同

骨酒に春のいのちを惜しみけり 正江

甘草の芽の旨き青饅 郁子

小灰蝶テラスハウスの庭にきて 淑代

一輪車こぐ子等のにぎはひ 弘子

弦月に指揮棒さつと振りおろす 文字

「霧」をテーマに綴るエッセイ 徒司

盆節季連絡船の棧橋に 郁

しょうゆ顔してげた履きでくる 文

ベッドではいつもラジオを流す彼 弘

犬に甘噛みさせつおしゃべり 代

混合の米をそれぞれ選り分けて 弘

殿それだけはおやめくだされ 司

月涼し熊本城の武者返し 郁

毒瓶肩に袖みちをゆく 代

伝へるズールー族の玉ビーズ 同

隅棚にある和紙の組箱 文

み仏の寝姿山も花ぐもり 代

字風絵風をあげる村びと 司

雨ききつ旅の名残の朝寝かな 孝子

雀隠れとなりし前栽 和子

田返しの遠山仰ぐこともなし 和子

下校の児等の班をつくりて 孝子

宵の月エレベーターにカレリーの香 孝子

淡く染まりし新生姜盛る 孝子

帰国せし後の彼岸の義理の兄 孝子

人日はばかる固き挨拶 孝子

先づ媚を売って掴ます贗ダイヤ 孝子

キャプテン帽をちよいと横ちよに 孝子

波を切る舳の像に月涼し 孝子

お告げの如く夜光虫燃ゆ 孝子

黒御簾の陰に撥拵賑なめる癖 孝子

座布団かへしびらもめくって 孝子

大連れて行かねばならず雪催ひ 孝子

会話教室ノープロブレム 孝子

花衣若返りたり十ばかり 孝子

かぎるひの中笑まふ妃殿下 孝子

大丈夫帯は自分で結べると

テレフォンガール昼は高一

寝不足の空に白々淡き月

吾と年経し禿び筆の秋

溢れ蚊が芋錢河童を頼りとし

熱き粥載る本復の膳

優性の遺伝子残す研究者

児育てママは女三十

花吹雪塔の水煙見返れば

筆筆築もうららかな午後

平成六年三月二十日

於 江東芭蕉記念館

辺

清

辺

壺

清

壺

り

淳

雅

辺

闘鶏の自慢のしゃもをとり逃がし

騙されつづけネッシーの夢

看護婦と婆の会話のくひ違ひ

よいといはれて買ひし杜仲茶

チマチョゴリまとひし胡坐の美しき

手に手をとって雪の国境

耳底に残るあいつの囁きが

鎮まりかへる神苑の奥

日本書紀・万葉集を積み上げて

いつの間にやら過ぎし傘齡

喘ぎつつマラソンのゆく月の道

ひっきりなしに鳴ける蟋蟀

そぞろ寒一茶の句碑にあひ寄れば

ジョークさっぱり理解せぬ人

関西の興業銀座にまかり出で

電池のきれし時計動かさず

花万葉蛇窯に薪を投げ入るる

誰か呼んでる陽炎のなか

平成六年三月二十日

於 江東芭蕉記念館

文

郁

江

弘

代

司

弘

文

弘

郁

司

郁

代

同

文

司

江

弘

春愉しあしで書きする小短冊

岡持ち提げてかけるブレイキ

ショットガン構へる男ずいに出て

少年兵の大麻吸ふ森

啼く鳥かはた川止の人柱

こんちきちんに風も死したり

総上げに言ひふくめられ別座敷

乳房の横のほくる愛しき

老妻の怪気は灰となるまでも

新酒きりりと含む利猪口

Jリーグ果てて月踏むサポーター

雲はしり去る築の崩れて

熊野那智打ちし寄進の札古りぬ

釣り銭で知る部屋の冷房

コンビニの赤川次郎立読みし

就職試験楽勝の吾子

餅花に息揃ひたり木遣衆

福寿草咲く下駄箱の上

平成六年四月十九日 首尾

於 桃径庵

和 孝

★新刊紹介★

東 明雅 著 芦 丈 翁 俳 諧 聞 書

二千円

昭和三十八年、信州浅間温泉での根津芦丈翁との対談を筆録。俳諧の神髄に觸れるところ多し。

明雅先生の中寿をお祝いして 秋元正江

三月十三日(日)江東芭蕉記念館に於いて東明雅先生の中寿をお祝いする集いを催しました。最初先生はこのお祝いを固く辞退されましたが、絶対に派手にしないことを条件にやっとお許しが出たのです。

会場も猫蓑会の定例会場である芭蕉記念館を全館借りきって、出席者九十三名で連句を巻くことでした。

当日は心配していたお天気も保って十二時に開会、中川哲氏の司会と開会のことばで進行しました。

お祝いの言葉を杉内徒司氏、『芦丈翁俳諧聞書』を播くと、芦丈翁遺稿集『芋日記』を入手した諏訪湖畔久保寺のことが思い出され、このように貴重な記録を上梓された明雅先生の地味な労に本当に感謝したいと述べられた。

ついで、つくば大学教授加藤慶二先生は、信州大学に同僚としてつとめていられた時代の明雅先生のエピソードを話され、学園紛争のときは身をもって文学部を守られ、将来は明雅先生のようになりたいとその人柄を讃えられました。

また、根津芦丈翁のお孫さんである根津美紗様は、明雅先生は祖父芦丈の連句をわかりやすくひろめて下さったと、感動をこめて話されました。

式田和子、下鉢清子、秋元正江の三人が、朱の袱紗をはらって記念品贈呈、記念品目録は「芦丈翁俳諧聞書」百冊です。

芋庵での当日の先生捌きの二十韻の発句と脇です。

『芦丈翁俳諧聞書』の中で先生は「連句は付けと転じを主軸とする日本独自の文学である。これは連歌の時代に発し、芭蕉により完成されたもので、この特質を失った現在の連句は到底蕉風俳諧の流れとは言い難い。この点をはじめて指摘されたのが芦丈先生であった。私は先生の遺志を襲いで何とか現代連句人の蒙を啓こうと努力して来た」と書いていられます。

お祝いの連句の座は、御衣黄、細川句、千里香、八重紅大島など桜にちなんだ十四席で六時にはめでたくお開きになりました。

明雅先生中寿の賀

歌仙 さまざまの花

秋元正江 捌

旅覗きさままの花書きとめて

正江

二間廊下に現るる猫の仔

黍穂

かぎ針で春のショールを揺り椅子に

千恵子

ハットトリックあげる歓声

博之

高速の車波滞月満ちぬ

みづゑ

しその実入りのむすび好評

美恵

運動会少女ら脛を惜しみなく

ゑ

キスにも落ちぬ口紅を買ふ

美

シヨーンソンの甘き詩曲にゆだねをり

之

細巻煙草くゆる灰皿

之

通商の円卓会議刻止めて

之

数ある祝賀電報の一つが披露され、明雅先生から芙紗様に「芦丈翁俳諧聞書」の贈呈がありました。

明雅先生は淡々とお礼の言葉をのべられ、傘寿のはなしから、上寿は寿命の長さを上中下に分けた最も長いもので、上寿百歳、中寿八十歳、下寿六十歳であること、『夏の日』ののっている。

年輪をのみの傘齡春迎う

ベレーの頬を撫ずる軟東風

の牛耳氏の傘齡の句のことから、

八十のがらくた爺山笑ふ
の発句を披露されました。

牛耳 明雅

中島啓世氏による乾杯、電通逸見氏の花束贈呈、閉会の辞の福井隆秀氏は、先生は体に気を付けられて、米寿、卒寿、白寿を迎えられるよう、さし当り米寿には連衆として連なりたいとのべました。参加者全員に明雅先生から『芦丈翁俳諧聞書』が送られました。

季刊連句9号「芦丈先生墓参行」を引用しますと、昭和60年4月22日猫蓑一行15名は高遠城跡の花を見て、夜陰激しき雨に明日の芦丈先生墓参を案じたが早晩に至って晴れ渡り長桂寺の住職の読経で一同墓前に額いたとあります。その日の朝、先生は私達がお参りする前に宿舎からお一人で墓参をすまされ、戻って再びお詣りをされたのです。芦丈先生へのお氣持の深さを知ることができました。

雲よ霞と六十余年の花乞食

芦丈仏

明雅

パンナコッタは「なんのこった」と
河童忌の胡瓜をもげば月かをる

欄間に探す部屋の冷房

一億の一般家庭皆中流

華僑の身すぎ三把刀より

銀輪を連ねてゆかんリラの道

憩すふベンチに聴ける囁

風船の印字不思議に歪まざる

への字への字の親と子の眉

よくわかるいびき頼りのD病棟

夜這ひ違ひが馴れ初めとなり

チャタレイに思ひとどかぬ森の人

蔓にすがりて冬苺ゆれ

酌み交はず山形の酒「雪むかえ」

テープに入れる婆の呪ひ

子を説明できず画も描けず

浸す手水にどこか神さび

月明り懐中時計の蓋重く

日展入選夢にみた夢

とろろ汁あちらこちらがむづがゆし

もぐらたたきのもぐらもこもこ

この辺にリサイクルゴミ捨てなさい

旧町名でものを尋ねる

花万朶細川匂の香の深く

地平はるかにたちし陽炎

千穂同千穂美穂同美穂之千美千美穂同美穂美穂同美穂同千穂同千穂同千穂同千穂

「芦丈翁俳諧聞書」

編集奮闘記

登坂かりん

三月十三日、日曜日で人けのない森下の街を芭蕉記念館に着くと、お玄関に明雅先生、奥様のお姿が見えた。ふっとその後ろ姿が振り向かれるや、戸外の私の方へ。「すみません、本当にごめんなさい、何度も何度もお電話してしまいました」。咄嗟に出た言葉がこんな風で、肝心の「おめでとうございます」の声は小さくなった。

去年五月頃の四宮会、その日も思い通りに句が成らず、連衆の去った掘炬燵の部屋にひとり私は居た。仏間には和子様お捌き的一座がまだ満座せずに居る。「こっちはいらっしやいよ、何だかシカトしてるみたいだもの」と誘って下さるが、胃キリキリ、「帰ります」と立ち上ったら、和子さんが「かりんさん、近々お願いたいたいことあるのよ」と。それが今回の「芦丈翁俳諧聞書」編集お手伝いのとば口だった。

今まで、沢山の人のナマ原稿を見て来た。出版社勤務編集部のみず第一は校正に慣れることだった。部厚い医学英語辞典を傍に

医学部教授の原稿に赤字を入れていた時間の方が、医師会、厚生省やらで取材、原稿書きに費やしたそれより遥かに長かったと思う。著者校に出しても誤字、悪文はそのままで戻され、本に刷り上ってから、文句をいわれた。でも、完全原稿なんて求めるのが無理。しかし「原稿通り坦々と、余計な調べはせずにやるがよし」の校正はしたくない。

十月、ワープロ原稿、初校ゲラ入手。夏月、冬月もろくに作れない、式目も丁度じやなくせに長年の習性か、誤字、脱字、見馴れぬ文字、言葉、人名は直ぐ目に入ってくる。伊那（諏訪）弁のリズムも心地いい。唇噛んで先生にルビをお振り頂いた。

東京の雲取山かと蒼山全集を繙けば実は雲鳥日記だった。更に頭註の選択、その原稿作成（『死ぬまでになすべきこと』如きご奮闘、和子様の賜）、長句短句の改行……と案の定、真っ赤っ赤っ赤ゲラの色に、日頃穏和な悟朗さん（制作）も真っ青。が「これは後世にずっと残る本。間違っちゃならないの、字が引っくり返っててもいい、間違っただけりゃ」とここは女の意地。ところが翌日、悟朗チャンコマで「写植や（手さし）さんにCOPYをさされて急遽、電算に切り替わり、数日後手くの別ゲ

ラを初校する羽目となる。

再校は年明けの一月中旬。ところが三校四校の段階で校閲時さながらに出でくる出てくる疑問点。「お電話は二、三回ぐらいで、いい加減しておきなさいよ」のゴツドマザーの掟を大幅に破り、明雅先生へお電話ラッシュ、その都度「今度が最後です」と断る。そして雪げ↓け、雪にかかれど↓る、狐屋↓狐↓に直してよ、直してよの連発に悟朗くんが渋るので、「私が印刷屋さんに行くッ」「自分勝手ッ」と絶交——。けれど懲りもなく、もう一件。「先生、連句辞典にも露となってますが、梅露は露ではないですか」「露です」「でも間に合わないかもしれません——」「いいよォ」のおやさしい先生のお声が胸に沁み、和子様におすがりし悟朗氏に直しOKを取りホッ、も束の間、製本が遅れてる、のTEL。先生のお誕生日が過ぎる。悟朗に「もう私の胃袋は開ける程も穴が無いの」と和子さんは脅迫、私だつて大いに悪人になっちゃったワ。ギーと車のとまる音がし、「芦丈翁俳諧聞書」がドカリと式田邸玄関に置かれたのは三月十日、TV「渡る世間は鬼ばかり」終了と同時でした。

(連句会案内)

●連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 江東芭蕉記念館
江東区常盤一六―三

(電) 三六三―一四四八

●柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

(電) 〇四七―七五―三七四六

●A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜
午前十時～十二時

会場 新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター

(電) 三三四―一九四一(代表)

●猫蒔会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館
江東区常盤一六―三

(電) 三六三―一四四八

雁帛往来

▽二月二十六日、神谷安子・久保田庸子・桑原美津・須田智恵・長崎和代・峯田政志の六氏に伝道書授与。慶祝。

終刊の辞

私はこのほど皆様に傘寿の賀の祝いをしていただけ、まことにありがたく厚くお礼申し上げます。

考えてみると、この三十年、寝てもさめても連句の外は、何も考えず、何もしない生活をして参りましたが、これがかえって私の体によく叶い、八十歳という自分でも想像できなかった齢を重ねることができたのだと存じ、その点でも、連句で相手して下さった方々のお陰と感謝致しております。

ただ、表面は健康そうに見えても、一番肝腎の頭脳が耄けて来たのは事実です。それに「南柏雑記」に書いたような心境になっておりますので、「季刊連句」はこの第四十五号で終刊にさせていただきますたく存じます。

ここに永く愛読して下さった方々、ならびに刊行をいろいろな意味で助けて下さった多くの方々に心からなるお礼を申し上げます次第です。

なお、購読料を前払いしていらっしゃる方には、可及的速かに一切を清算して、残金全額を御返却致すつもりでございますので、御了承下さるようお願い申し上げます。バックナンバー御入用の方はお申し込み下さい。

季刊「連句」第四十五号

平成六年六月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方

電話 〇四七―(七五)二一九二

振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六―一

電話 〇四七―(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版五

B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季節辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学会編
B5 一八〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編
A5 六〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編
B6 三二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編
B6 三三〇〇円

日本語語源辞典 堀井令以知編
B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編
B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 寧編
B6 三三〇〇円

隠語辞典 樺垣 実実編
B6 三三〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編
A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井 宗哲編
B6 三三〇〇円

明治新語俗語辞典 榎島忠夫他編
B6 三三〇〇円

難訓辞典 中山 泰昌編
B5 三二〇〇円

名乗辞典 荒木 良道編
B6 二八〇〇円

名数教詞辞典 森 謙彦編
B6 四一五〇円

あいさつ語辞典 奥山 益朗編
B6 二八〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 鈴木 業三編
B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編
B6 二八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編
B6 二八〇〇円

表現類語辞典 藤原亨一他編
B6 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編
B6 二八〇〇円

東京堂出版

電話03-3233-3741~2

101東京都千代田区神田錦町3-7